

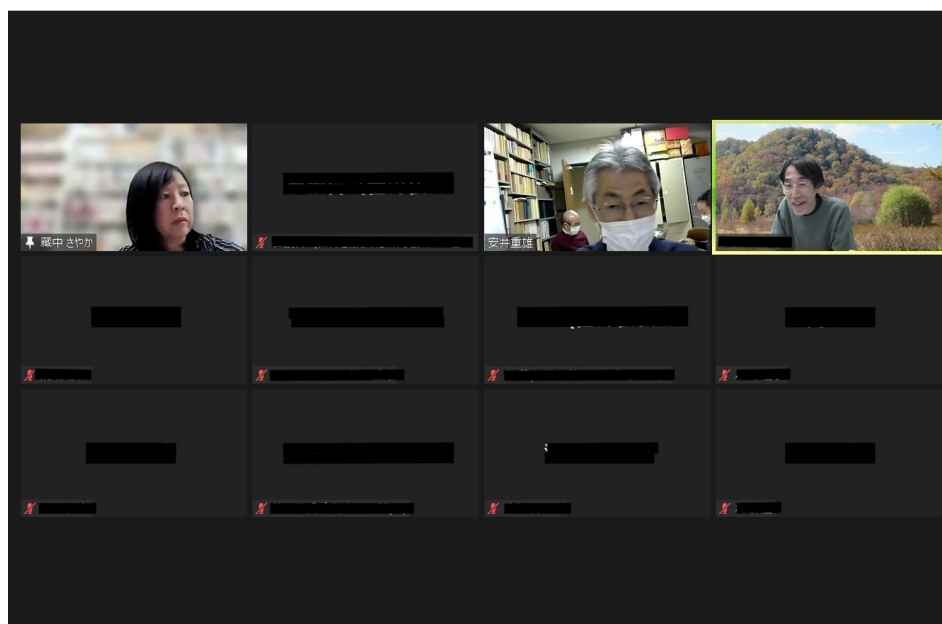
❖ 講演会・研究セミナー ❖

古典籍資料総合研究班 古典籍資料研究プロジェクト
「歌合の本質とその集積についての研究」

『和歌一字抄』の歌合歌
治承二年廿二番歌合をめぐって

2022 年 12 月 4 日(日) 15:00～18:00

オンライン開催 (Zoom)



オンライン研究会

❖ 概 要 ❖

2022 年 12 月 4 日（日）、古典籍資料総合研究班主催の古典籍資料研究プロジェクト「歌合の本質とその集積についての研究」の一環として、藏中さやか氏（神戸女学院大学教授）と中村文氏（日本女子大学非常勤講師）を講師に招き研究集会が開催された。藏中氏は『和歌一字抄』の歌合歌」、中村氏は「治承二年廿二番歌合をめぐる」と題して研究報告を行った。安井重雄氏（龍谷大学文学部教授）の司会の下、両氏の報告に続き、参加者全員での討論が行われた。

講 演 者： 藏中 さやか 氏（神戸女学院大学 教授）



藏中 氏

藏中氏は、『和歌一字抄』を取り上げその中に歌合を出典とする和歌がどれほど、またどのように組み込まれているのかを、『袋草紙』や『夫木和歌抄』との関係を視野に入れつつ議論を展開した。また、藤原清輔（1104～1177）著作を貫き支えた歌合資料の性格はどのようなものであったのか、『和歌一字抄』はどのように編纂されたものであったのか、報告の

中では歌合資料がいかに使われたかという視点から、明らかに歌合資料から採録したと考えられる和歌を指摘することによって考察を加えた。主として『和歌一字抄』の内部の問題、『袋草紙』『夫木和歌抄』との関係、歌合本文との異同に着目しながら、個々の事例について概観した後、歌合歌は標目によって構成する『和歌一字抄』を支える重要資料であると指摘した。『和歌一字抄』の標目は歌合の歌題によって立てられている場合があり、その編纂は歌題中の「一字」を重視したものである。『袋草紙』採録歌と必ずしも重ならないのは、歌題中の標目に掲げる一字と和歌表現との関係に着目し採歌したためと推測できる。また『和歌一字抄』で用いられた歌合資料は清輔の手元にあったと考えられるが、『夫木和歌抄』には残っていない場合もある。総じて、中世において、『和歌一字抄』がそれなり評価されていたのは、清輔の手になるものと認識されていたことに関係があるという。

講演者： 中村 文 氏（日本女子大学 非常勤講師）



安井 氏（司会）、中村 氏

中村氏は、まず治承二年廿二番歌合の概要を紹介し、ついで出詠者をそれぞれ洗い直すことによって、当歌合のあり方や特色について考察を行った。出詠者には後白河院近臣が多く含まれる点が注目すべきである。廿二番歌合は、藤原頼輔（1112～1186）を頭目にいたたく院近臣グループを左方に配し、石清水祠官および源有房（生没年不詳）につながる人々を右方に配するという趣向で構成されたのではないかと推測した。そして、キーとなった

人物は、院近臣と石清水祠官家の双方に深い関わりを持っていた有房で、有房の企画のもと、藤原親盛など院近臣の主要歌人が周囲に声をかけてこの催しが成り立ったとする。当歌合は、歌壇の主流とは離れたところに、後白河院近臣を中心とする別の和歌の場が脈々と存在し続けていた。新古今時代に入って、道清が正治二年石清水若宮歌合を決行し、さらにそれを受け継ぐように、建仁元年石清水社歌合、および元久元年十月石清水若宮歌合が行われていることは、歌壇の主流から離れた場で催行された歌合が新古今時代まで影響を及ぼした可能性を想定されるという。